

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
98-006	カンボジアにおける地域社会の変化と個人史 —ウドン旧王城跡を中心とした事例研究—		
	カンボジア	プノンペン大学	1999.8 ~
	小林 知	京都大学大学院	院生博士

研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

本研究は、カンボジアがこの半世紀近くに経験した激動の社会史とその中を生きた諸個人の取り組みを解明することを目的とする。具体的には、ウドン旧王城跡を中心として住民の生活状況と個人史に関する詳細な聞き取り調査を行い、当該地域社会の近現代における具体的変化と人々の経験の主観的解釈に存在する多元的な現実を併せて考察する。

本研究は二つの研究内容からなる。第一は当該地域社会の編成過程を具体的に解明することである。当該地域を理解する上で最も基礎的な主題として、住民の父母、祖父母の世代の記憶を辿り地域社会の形成過程を考察する。また、1975年に始まる民主カンプチア(クメール・ルージュ)政権期前後からの地域社会の変化を実証的に考察することも重要である。民主カンプチア政権は、同年4月プノンペン解放後直ちに200万人とも推算される都市人口を農村社会に追放した。そして世帯別労働力を人工的に解体し労働組を組織するなど農村社会の急激な変革を目指した。1970年代を中心としたカンボジア農村社会の変容とその後の復興の実態については、未だ「悲劇のカンボジア史」といった一元的な言説が繰り返されるに止まり、地域史を考慮した社会科学研究はほとんど行われていない。したがって第二の研究内容は、詳細な個人史の聞き取りによりカンボジア現代史の多元的な局面とその現実を明らかにすることである。申請者は、当該地域に短期的な訪問を繰り返し基礎的資料を収集するなかでインフォーマントの選定を行い、彼らの個人史を集中的に聞き取る。本人の主観的な現実の把握を重視し、複雑で重層的な存在としての個人の語る人生／生活の歴史を対象とすることで、厳しく変容する地域社会を生きた個人の人生観、世界認識と、今後の生活への希望を明らかにしたい。

調査地のウドンはプノンペンの北西約40kmのトンレ・サーブ河西岸に位置し、1865年まで王城がおかれていた。現在、王城跡は南北約400m東西約600mにわたって続く半ば崩れた3m高の土壁によって確認される。場内には上座仏教を信仰するクメール人の住民が多いが、中国系住民による学校も見られ、多様な来歴をもつ人々の木造高床式家屋がほぼ一定間隔で並ぶ。本研究は、約130年前までは一般人が住むことのなかったこの場を中心に繰り広げられたカンボジア人の営みに焦点をあわせる。

研究題目「カンボジアにおける地域社会の変化と個人史」

0. はじめに

報告者は、計約三年半の現地滞在を終え、2002年4月21日にカンボジアより帰国した。滞在中は、その後半の約一年三ヶ月に渡って調査地定着型のフィールドワークを実施した。

研究活動を目的とした今回の一連の滞在は、1998年11月1日に京都大学後援会より半年間の助成を受けて始めた。その後、同後援会への成果報告のため1999年5月9日から29日にかけて一時帰国したのち再びカンボジアへと戻り、1999年8月より松下国際財団「松下アジアスカラシップ」による助成（題目：「カンボジアにおける地域社会の変化と個人史」）を受け、留学研究活動を継続した。そして、同スカラシップの二年間という助成期間が過ぎた後も、約半年間の滞在期間の延長を財団に申請し、結局2002年4月まで滞在を続けた。またこの間、在籍する京都大学大学院人間・環境学研究科からは、1999年4月から2002年3月までの計三年間の休学申請が認められていた。

帰国後約一カ月の現在、聞き取り調査のノートは依然未整理の段階にあり、以下の成果報告の執筆に際して定着村の村落社会の構造にかかわる具体的なデータや個別のライフヒストリーの紹介などを提示することは無理であった。また仮に調査ノートの整理が終わっていたとしても、必要とされる調査地の社会変容にかかわるマクロな歴史的状況の説明のための文献調査が、まだ本格的に進んでいない。しかしこのような制約を踏まえつつも以下に、今回の留学研究活動の概要とその成果を記述してみたい。

1. 調査地域の概況

本研究の実施にあたっては、当初、プノンペンの北30kmに位置するコンボンスプー州ウドン郡を調査地に予定していた。しかし、滞在をとおしてカンボジア社会の治安の好転を実感し、また1999年12月から2000年1月にかけておこなわれたシエムリアップ州のアンコールワット遺跡群周辺水利灌漑調査への参加をとおして、カンボジア国内でも特にトンレサップ湖水系の地域の生態、歴史、社会構成に大きな関心を抱くことになってから、調査地の変更を模索した。そして、結果的に、コンボントム州コンボンスヴァーイ郡サンコー区を新たな調査地として選びだした。

コンボントム州は、シエムリアップ州とともにトンレサップ湖北岸地域をかたちづくる。トンレサップ湖は、カンボジアの国土の中央に位置する巨大な淡水湖である。乾季になるとその水はゆるやかな勾配にしたがって「ビンの首」に位置するコンボンチュナン付近に流れ集まり、トンレサップ河となり南下する。そして、首都プノンペンにてメコン河と合流し、ベトナムへと向かう。しかし、雨季に入り一ヶ月ほどするとメコン河の増水によってこの流れは逆転し、水はプノンペンからコンボンチュナンへと流れはじめる。この逆流現象と、さらに周囲の流域面積から大量の雨季の雨水が流れ込むことで、トンレサップの湖面積は雨季には乾季の約七倍にも拡大する。湖をぐるりと取り巻いてひろがる広大な低木林は、この増水の影響をうけ一年の約半分は水に浸かり、魚類にとって格好の生育環境を提供する。この特有の生態環境は、魚類に限らず、トンレサップを世界有数の生物資源の宝庫とならしめている。

コンボンスヴァーイ郡は、コンボントム州の中でも、バライ郡やストーン郡などとともにトンレサップ湖の増水域をその領域内に含む。調査地のサンコー区はこのコンボンスヴァーイ郡の南東端に位置し、住民の生活や歴史には漁業、

浮稲作などの生業を通してトンレサープ湖の存在の大きさがうかがわれる。区の中央にはシエムリアップとプノンペンを結ぶ国道6A号線が東西へとはしり、プノンペンからは国道沿いに200km弱、州都コンボントムからは25kmほどの距離がある。国道とはいえ、コンボントムから西はまだ未舗装で、雨季には非常な悪路となる。カンボジア最大の観光地でありタイからの物資流通の要点でもあるシエムリアップ州と首都プノンペンを結ぶ幹線道路として、国道の交通量は近年急増している。2000年12月には、フンセン首相がADBの援助による国道6A号線の全面舗装化の完成を2003年内に公約したため、現在、急ピッチで橋の架け替え工事などが進められている。

サンコー区の現在の人口、家族数、戸数といった基本的な統計数値を、村長を対象とした聞き取りに基づき各行政村ごとにまとめたものが次である。

サンコー区内の各村落の基本的統計資料 (2000年7月)

記号	村落名	男性	女性	人口	家族数	戸数	クロム数
A	Krosang Kho	940	894	1834	289	270	28
B	Krosang Ko	774	813	1587	272	143	27
C	Kbel	892	920	1812	292	270	28
D	Sankhor Kho	889	1100	1989	355	330	34
E	Prasat	258	238	496	98	79	10
F	Sompaumeas	918	923	1841	291	236	27
G	Slaengkphoh	244	248	492	80	80	8
H	Chey	280	272	552	93	87	10
I	Sari	529	544	1073	175	168	17
J	Sankhor Ko	233	243	476	79	79	8
K	Veal	434	434	868	151	118	15
L	Ballang	*	*	569	87	87	10
M	Tangkrouch	205	307	512	63	63	9
N	Ompel	186	209	395	62	50	6

1998年に行われた全国人口センサスによると、カンボジアの全人口は11,437,656人である。これを全国の行政区数1,609で割ると、一行政区あたりの平均人口は約7,108.5人となる。この計算によると、サンコー区は全国平均の約二倍の人口規模をもつ。実際、同センサスによると、コンボントム州コンボンスヴァーイ郡の全9行政区のうち、サンコー区は二番目に人口が多い(ちなみに、同郡内で人口最小の行政区の人口数は2,877人である)。

サンコー区は、上の表からわかるように、14の行政村から構成される。各行政村の集落は、概して標高10m付近に位置している。内9か村は少なくともその集落の一端が国道に接し、他の1か村は国道の北に、残り4か村は国道の南に位置する。国道より南のこの4か村は、サンコー区の西端で国道より南に分岐する旧道上の土地の高みにある。この旧道沿いには、大ぶりのレンガで造られたプレアンコール期の遺跡(建造は七世紀?)がひとつ存在し、地図中で直線につらなるこの旧道の高みの列そのものが人造のものではないかという可能性を思わせる。サンコー区の伝統的生業の中心は、稲作と漁業である。どちらも家族単位で行われることが多いが、漁業については、州政府から漁業権を買い受け、網を使った大規模な集団漁もみうけられる。

稲作は、雨季一期作が圧倒的である。2000~2002年の二年間には、洪水と旱魃による雨季稲の不作に業を煮やしたごく一部の住民がIRRI品種の乾季稲の栽培を試みたが、大多数は用水の確保が十分でなく、ほとんど収穫までこぎつけることができなかった。雨季作は大別して三種類の田で行われる。雨季にトンレサープの増水が直接及ぶ南部では、

浮稲がつくられる。浮稲田は3~4月に耕起と散播が行われたのちは水任せとなり、増水が引いた12月~1月に収穫が行われる。耕起は、現在、豆の収穫を終えてコンボンチャム州などからやってくる大型トラクターを雇うかたちで行われることが多い。収穫は、サンコー区より北方の地域の村々から時期になるとやってくる若い女性を中心としたグループや同じ集落内の他の住民を雇って行うことが多い。施肥と歴史の点からみると、この浮稲田もさらに二つに分けられる。国道から3~4km南の浮稲田は、以前は荒蕪地として放置されていた土地で、ヘンサムリン時代から盛んに耕作されるようになったが、施肥が必要である。一方、国道から5~8km南の遠方の浮稲田では、施肥の必要はない。品種は現在、伝統的な赤米種とヘンサムリン時代に導入された白米種とがみられるが、どちらも食感が硬く住民は好んで食べない。つまり、浮稲の収穫は基本的に地元で商人に売られるか、家庭規模の酒の醸造などに使われる。また、浮稲田の一部では乾季にスイカが栽培される。

集落の周辺には移植田がある。浮稲と対照的に、移植田の耕作は家庭内消費が目的である。いうまでもなく天水依存型であり、収穫は年年の降雨の状況に大きく左右される。またここでは移植田と表したが、この田でも降雨などの諸状況次第では、耕起のあと苗代作りをはぶき、直接田に散播することもある。降雨の状況を見守りながら、一般に6~7月には苗代作りと田植えが始まり、11~12月には稲刈りが行われる。耕起は、二頭引きの牛力を利用して家族単位で行われる。一般に男性の仕事である。苗代から苗を抜き、それを田に運んで移植する作業には多くの人手が必要となる。しかし田植え稲刈り作業にいわゆる労働交換は厳密ではなく、近親者による助け合いは見られるものの、金銭を介した労働力の確保も多い。品種は伝統品種と新品種の両方がみられ、田の地形的水文的条件により早稲・中稲・晩稲という栽培期間や成育丈の長さなどを考慮し、それぞれが選択する。政府による新品種の奨励も活発でない一方、住民の側の伝統品種へのこだわりも少ないようだった。施肥は、家計が許せば化学肥料を区内で購入し、用いる場合が多い。しかし、化学肥料の投与は土地を硬くしてしまうといった悪影響も、比較的広く口にされていた。除草はしない。防虫剤の投与も、一般的ではない。

国道の北3kmほどの森に近い土地の一部では、陸稲がごく細々と行われている。そのひとつの利点は、牛や水牛を所有しない者でも耕作可能なことである。火入れをしたあとつき棒で穴をあけ、播種したのは放置する。耕起や施肥の面倒はない。また、森近くの土地では、土地所有の形態も集落近くほど厳密ではないという。よって、陸稲は何らかの理由により耕作地がない家族が行うものだという意見も聞いたが、新開地を開墾するひとつの段階として、陸稲を何年か耕作したのち、耕起して移植田に移行することもある。

漁業は、家庭内消費を目的とした小規模のものは、非常に多くの家族で行われている。雨季に、集落近辺の移植田や水路に仕掛けた網や釣り針を腰の上まで水につかってみてまわるのは、男の子の仕事である。父親や若者も機をみてより南へでかけ、仲間二三人で引き網をしたり、水上にやぐらを組んで一本釣りをしたりする。乾季も深まると、増水が引いた後に残された水溜りでは何度も網が引かれ、小魚まで取り尽くされる。このような家庭内消費を目的とした漁でも、時に、遠出し一週間以上戻ってこないこともある。とった魚は塩をまぶして干し、家へ帰るまで保存する。区内の特に5つの村では、売買を目的に漁をする者も多い。中には田地を所有せず、漁に専門化した世帯もある。増水がピークに達してしまうと、広がった水域に魚は拡散してしまう。一般に魚がとりやすいのは、5~8月の増水期と11~2月の減水期である。減水期には、仕掛けを6km以上にもばして魚の進路をさえぎり、三箇所に仕掛けたウケにそれを導いて獲る大規模な漁もみられる。一応産卵期は禁漁期間とされているが、あまり厳密に守られているとはいえない。獲った魚は鮮魚のままスクーター一台でやってくる地元の買い付け人に卸され、翌朝には区内やコンボントムの市場で売られる。プノンベンにまで卸されることは少ない。

2. フィールドワーク調査にいたるまで

今回の滞在期間中の活動は、大きく三つの時期に分けられる。まず活動の第一期として、1998年12月よりクメール語の学習を行った。語学中心の生活が一年以上過ぎた後、2000年3月からは第二期として、調査地選定に向けて短期間の調査活動を計画し、実行した。そして2000年12月末以降は、州政府より正式に調査許可を取り、最終段階として調査地への定着に基づくフィールドワークを開始した。

現地語の習得は、オフィシャルな声明や観察だけでなく対象社会の人々との日常的な会話から問題を立ち上げ、考察してゆこうとした場合、大きな重要性をもつ。私の場合、最初の一年間は禁欲的にほとんどプノンペンから外へ出ることもなく、言葉の勉強で費やされた。カンボジアには、バンコクやジャカルタなどのような外国人が現地語を学ぶための充実した施設はない。国立のプノンペン外国語大学には確かに初級、中級、上級と分けられた外国人用のクメール語学習三ヶ月コースがあったが、ヒアリングや文法、文章作成といったクラスが専門教師別に構成されているわけでもなく、ただ時々参加者がいっせいに同じノートを作ってゆけただけだった。ほかに、当時のプノンペンにはプライベートのクメール語学校が二校存在した。

カンボジアの場合、このような語学学校の生徒の大半は現地のNGOや国際機関に新規着任した人々で、普通は文字学習を省きアルファベットでの翻字システムを用いて会話の基礎を短期間で学ぶだけである。しかし、授業内容、つまり教師の質はともかく、教師と生徒の対一のクラスが可能といった融通はプライベートスクールの方がきき、希望次第でクメール文字の学習を前提とした授業も可能だった。結局私は、外語大でも教えていたプノンペン大学文学部の先生に個人授業を依頼して、一日一時間の授業を週四日間行ったほか、プライベートのクメール語学校の一つで毎日一時間の個人授業を受けた。集団でのクラス授業よりも、個人レッスンの方が内容の濃い一時間を過ごせることはいうまでもなく、下宿に帰ってからの予習復習に要す時間を考えると、一日に二時間の授業参加で十分だった。また、過去の語学学習の経験から、教師との間では最初から他の言語を介さずにクメール語を用いてクメール語を学ぶようにした。結局、クメール語のレッスンは、2000年3月に調査地の選定に向けて短期調査を実施するにいたるまで計一年四ヶ月あまり続けた。

語学学習が半年を数えたころ、機会を見て地方への旅行も始めた。具体的には、カンボジア唯一の海港シハヌークヴィル市、アンコール遺跡群を擁する観光地シエムリアップ州、初めて農村に泊まったベトナム国境に近いスヴァーイリエン州、ちょっとした高地で散村形態が印象的だったコンポート州チューク郡、メコン河上流のクロチェ州、そして七世紀のプレアンコール期の遺跡をみるためにコンボントム州などへ行った。特にスヴァーイリエン、コンポート、コンボントムへの旅行では、カンボジア人の友人の掃郷に同行するかたちをとったため、その家族や友人たちの日常生活の一端を知ることができ、今でも思い出深い。

このような語学学習中心の生活に一区切りをつける契機となったのは、シエムリアップ州アンコール遺跡群周辺の水利環境についての短期調査（1999年12月26日から翌年1月19日）への参加であった。この調査は、アンコール文明は巨大バライを灌漑に利用した水利都市として発展したというフランス人研究者グロリエの説に疑問を抱いた京都大学東南アジア研究センターの福井捷朗先生（当時）が中心となって組織されたものだった。はじめの二週間あまりの参加者は、同センターの河野泰之先生や龍谷大学の中村尚司先生など六名の小グループで、シエムリアップ州から通いで周辺の地質地形、耕作体系、農地の中の水路や溜池、タムノップといわれる土堰、そして従来考古学者を中心に水利に関

係しているといわれてきたアンコール時代の遺構などを見て周り、期間最後の三日間には多数の歴史研究者の団を迎えてグロリエ説の是非について集団で討議した。

この短期調査への参加は、何よりも時期的に、学習期間が一年をかぞえた自分自身のクメール語能力の力試しとして絶好の機会だった。また正直なところ、私は調査隊の最大の問題関心であったアンコール時代の水利環境、農業体系についてはあまり興味をもてなかったが、以前から将来の農村での定着調査の際には地域の生業をより深く理解したいと考えていたため、農学が専門の先生方と稲刈りのシーズンを迎えたシエムリアップ周辺の水田を歩き、その田で作業をしている人々と直に会話を重ねる作業を経験することは、その後のフィールドワークの実施を念頭においても願ってもないものだった。

また結果的にこの調査への参加を通して、その後の自分自身の調査の予定地変更を決心した。私は、研究計画を提出した段階では、調査地としてはポストアンコール期の王城跡があるコンボンスプー州ウドン郡を挙げた。ウドンは国道五号線に沿ってプノンペンより北へ30kmほど行った、トンレサップ河の西岸に位置する。私はかつて1996年12月に、歴史学専攻の東京大学の大学院生が王城跡地の地図作りをした際に測量のお手伝いをし、比較的長期にわたってウドンの村々を歩いた。つまり、研究助成申請の段階ではウドンがカンボジア国内でその様子を最も具体的に知る地域だった。

しかし、シエムリアップ州での短期調査が終わる頃には、コンボントム州に将来の定着調査地の可能性をさぐろうと心に決めた。ひとつには、調査を通してトンレサップ湖から緩やかに上昇する地理的勾配にしたがって広がる三種類の稲作形態（浮稲田、移植田、陸稲）の存在に興味を覚えたことが挙げられる。また特に、調査が始まって一週間目にコンボンクレアンという猫の額ほどの陸地の周りに水上家屋があつまった「島」のような大集落（2000家族以上）に足を運び、一年の半分は湖の増水により道が絶たれながらも季節変動にあわせた漁業と畑作（スイカ、かぼちゃ、緑豆など）を行い、またその流通を通してタイ国境からプノンペンまで人の行き来をもつという、トンレサップ湖周辺地域社会の生業の面でも人の移動という面でも独自の世界に強い印象を受けた。

今から振り返ると、方言がきついシエムリアップにおいて、いろはから始めて一年経ったばかりの自分のクメール語がどれだけ通じていたかは少々自信がない。が、ともかく語学中心のルーティーン化したプノンペンの生活の中でぼやけがちになっていた自分自身の渡航目標、カンボジア農村で長期定着調査を実施するというそれに向けて実際に走り始める助走として、非常に幸運な調査参加だった。そしてその助走の勢いを切らさないように、調査終了後はプノンペンに戻ると、語学のプログラムを終わらせ、さっそくコンボントムへのアプローチの準備を始めた。

3. フィールドワーク調査実施の概要

フィールドワーク調査実施の第一歩は、2000年3～4月に行ったコンボントム州ストングサエン郡・コンボンスヴァーイ郡における仏教寺院の訪問調査だった。調査にあたっては、それまでに友人の日本人研究者を介して知り合いになっていたプノンペンの宗教省の秘書官氏からコンボントムの宗教省州事務所宛てに紹介状をいただき、それを公式の調査許可願いとして利用した。もともと私は、特にカンボジアの人々の宗教信仰を研究対象にする計画をもっていなかったが、カンボジアの農村地帯には仏教寺院が遍在している事実をふまえ、農村地帯を広く回り調査地域の選出のためのあたりをつけるという目的のためには、仏教寺院をひとつの目標としてアプローチするのが適当かと思われた。

当時の私はカンボジアの上座仏教信仰についての基礎知識もなく、とりあえずプノンペンの仏教研究所の図書室で見つけたフランス極東学院の寺院調査で使われていた資料を参考にして、質問表を作成した。ポルポト時代に破壊された寺院内の建築物の再建状況についての質問を中心としながらも、その再建のための資金調達財源や、僧侶の選挙への

参加の問題を含ませた独自の内容を含ませた。実際の調査は、宗教省の州事務所の紹介で郡役所の宗教部門の担当者に道案内を頼み、州都からの通いで毎日スクーターにのり農村に散在する仏教寺院をたずねて回った。当初からアシスタントも通訳も同伴せず、一人で聞き取りを行った。同行した郡の宗教部門担当者は、目的とした寺院に着くと早々に真蘆をひろげ昼寝をはじめるともあり、調査補助者というわけではなかった。これには最初、それなりに謝礼も払うのだから少しは配慮してくれてもよいのではと腹を立てたこともあったが、一連のフィールドワークを終えた今から考えると、その後の調査活動にあたっての自分自身の独立心が鍛えられた点で感謝している。

とにかく、この寺院訪問の調査を通しては、コンポントム州都周辺の農村地帯の一般的な地理、生業や歴史の様子とともに、ポルポト時代以降のカンボジア仏教のハード面、つまり器としての仏教寺院の復興状況がつかめたことが収穫だった。また、この短期調査中は、日々繰り返したさまざまな寺院でのインタビューだけでなく、毎日の宿泊も仏教寺院に身を置いたため、カンボジア仏教信仰のソフト面、つまり中身の実践形態についても初歩的な理解を得ることができ、幸運だった。そしてなによりも、この調査を通してその後の定着調査の地域を選定することができた。

今から考えると、その後の調査地域に定めたサンコー区との出会いはさまざまな奇縁に彩られていたように思う。最初の長期滞在調査を終えた今は、まだ今後もつづく調査地域とのかかわりを考えると、その一つ一つを振り返るには時期尚早と思われる。しかし、さまざまな偶然が作用していたことは確実だといえる。

仏教寺院の訪問調査を終えいったんプノンペンに戻ると、次は2000年6～7月にかけてサンコー区内の14の行政村をそれぞれ訪問し、主に老人男性を対象にして村落社会の歴史、生業体系、社会構造に関する聞き取りを行った。これは、地域社会としてサンコー区全体をみたときの、その地に根ざした歴史と現在の生活状況を知り、その社会の形成過程を知るうえで大変有益だった。それぞれの村々では、歴史的な発展過程が少しずつ異なるものの、1920年代くらいに多くの中国人移民があった。当時は道路交通が未発達であったこと、中国系の移民の多くはその後コメの交易に従事し一時はプノンペンとの間に大きな船の行き来があったこと、1970年以降はいちはやく共産勢力の解放区に入りアメリカの空襲などをうけていたこと、ポルポト時代には大規模な運河の建設などに多くが労働力として酷使されたこと、ヴェトナム侵攻による社会主義政権樹立の後も長らくクメールルージュと政府軍の戦闘の舞台であったことなど、大まかながらも地域史としてあるひとつの世界が浮かび上がってきた。

この後、8月には大洪水の被害をうけた浮稲田の様子を見に、そして9月から10月にかけてもプチュムバン儀礼、カタン儀礼といった仏教年中行事の様子を観察するためにサンコーを訪れ、その後の長期定着調査実現の可能性を探るとともに、サンコー区の文化的状況をよりよく知るために、地元の人々との会話を繰り返した。この仏教儀礼の観察を始めた時点では、特にサンコー区において二つの異なる仏教信仰実践がみえてきたのが非常に興味深かった。例えば、サンコー区内の一寺院では、カンボジアの民族的伝統行事として現在も全国規模で盛大に行われるプチュムバン儀礼の大半を、1940年代後半からやめてしまっている。それは、現世の事件はすべて当事者の業によるという教義を尊重し、それまで祖父母らが行ってきた慣習的な「伝統」を迷信として切り捨てた結果だと地元住民はいう。そしてここにサンコー区ではもうひとつ面白い事実がからんでいた。それは、サンコー区を全体としてみた場合、ポルポト時代以前は伝統的信仰実践を支持する人々が多かったが、現在は、どちらかといえば教義重視の信仰実践が卓越してみえるという変化である。当初、私はこれを老人たちが信仰を変えたという、いってみれば「改宗」「転向」とでもいえる現象があったのかと推測してみた。しかし現在は、問題はそんなに簡単な話ではないと考え直している。しかし少なくとも、ポルポト時代の社会変革が、人々にそれまで無造作に行ってきたいわゆる伝統的な実践の意味・解釈を再考する機会を与えたと

いうことは許されるかもしれない。

このような短期訪問を繰り返した後、2000年12月末からはサンコー区への定着を果たし、本格的な人類学的フィールドワークを始めた。その準備としては、まずクメール語にて調査計画書を作成しプノンペン大学学長およびロイヤルアカデミー（王立学士院）からの承認を得た上で、紹介状を添えてコンポントム州政府へ提出した。また、警察関係も、地元のサンコー区の警官長にパスポート、ビザのコピーを提出し、州警察からの許可を求めた。調査許可申請において作成した研究計画は、助成題目「カンボジアにおける地域社会の変化と個人史」に若干手を加え、「カンボジア農村における社会の性質に関する変容と持続性」として、特に社会変容への関心を強調した内容となった。何よりも、カンボジアにおいてこのような長期定着フィールドワークを行う前例はこの30年余り皆無だったため、調査地へのオフィシャルな入り方には常々不安があったが、結果的にはこのような順序を踏み最後まで大きな問題が起こることはなかった。

サンコー区に定着してからは、地元の区長や村長ら地元関係者との連携を密にすることを心がけ、当日の行動で集落を離れることが予定された場合には事前に連絡をとるようにした。治安の安定は実感していたものの、住み込みも長期化すると、私という存在が周辺地域に広く知られるようになる。つまり、こちらは名前も出身村も知らないが、むこうはこちらを知っているという事態が増えてくる。このような長期定着調査に特有の事情をかんがみて、特に調査活動の後半には地元関係者の勧めもあり、日々の調査活動の行動範囲は意識的に狭めるようにした。東南アジアの他の国では現在まず無用なこのような配慮も、カンボジアではまだ必要であろうと思う。また、州の宗教省役人とは、州都に出かけるたびごとに変わらずつきあいをつづけた。地元の警察関係者とも、特に贈与品などを送ることはなかったが、友好的な関係を維持するように努めた。

サンコー区の地元の人々からは、概して温かく親しみをもった態度での対応を受けた。正直なところ、調査期間中は日常的に「私は貧しい、お金をくれ、助けてくれ」といった言葉を受けたが、一般にその言葉に真剣な期待は含まれておらず、特にお互いがよく知り合ってから是一種の日常的な挨拶のようなものであった。自己紹介としては、自分は社会学を専攻していてカンボジアの文化、社会的慣習の調査にきたと村人には説明したが、特に調査地域への最初のアプローチが仏教寺院をめぐるものだったため、カンボジアの仏教信仰を調査にきたものとみなされていることも多かった。実際、定着を果たした後は、定着村落での悉皆調査も行ったが、一ヶ月に四度ある仏日には区内の4寺院のどれかに顔を出し、老人たちと行動をとるが多かった。地元の人々は、日本が仏教国であることは承知で、日本の仏教のあり方などについての質問をよく受けたが、また特に日本からカンボジアへの近年の多額の開発援助も知っており、時々感謝の言葉を受けた。私が日本人であったことは、フィールドにおいてある意味有利に働いていたように思う。

調査地定着を果たしてから調査終了までの一年三ヶ月あまりの間は、2001年8月に三週間ほどプノンペンに長期滞在したほかは、大体調査地周辺に身を置き続けた。それでも一ヶ月に一度、三日ほどの日程で電子メールのチェックを目的にプノンペンには出かけた。日常は、区内の二か村での全戸世帯調査、諸宗教儀礼の参与観察を中心に、調査地でのさまざまな人々との日常的な会話から、彼らの生活様式、生業体系や特に地域内、地域外の他社会との交流のあり方などを中心に、その歴史的な変容を明らかにするようつとめた。研究題目で強調した個人史の聞き取りも、定着した村落内の老人のほか、特に滞在の後半では区内の4寺院の俗人代表者や住職経験者を対象に行った。

このようにしてフィールドワークをつづけながら、定着調査地で予定されていた一年三ヶ月あまりの日々はあっという間に過ぎてしまった。実際、日本への帰国を果たした今思い返すと、本当に短い間の出来事だったように感じられる。

4. 今後の課題

帰国後一ヶ月の現在、カンボジアでの滞在期間中は調査活動に専念し、執筆または執筆のためのノートの整理は行っていないため、文章としてかたちになった成果はまだまとめられていない。そこで以下では、今回のフィールドワーク調査の実施によって得られた資料と経験、問題意識をもとに今後の課題としていま考えている研究トピックをいくつか記して、成果の報告にかえたい。

今後文章化してゆく第一のトピックは、カンボジアの農村社会についての民族誌的データを用いた一連の基礎的な報告である。研究計画の申請時に強調したように、現在、日本においては、カンボジア社会に関する社会科学的な研究は甚だ少ない。よって、例えば、農村社会の土地所有の歴史と現状、村落社会の世帯構成または親族関係の実際、水稻耕作を中心とした生業の技術的・経済的分析、仏教寺院の復興にかかわる地方的状況など、他の東南アジア各国ではすでに厚い層をもつような基本的な議論も、ことカンボジア研究においてはまだ着手されていない。私は、今回の現地調査の成果として、まずこれらの基礎的分野について具体的な資料を用いた報告を行いたい。

次に考えているのは、調査地であるサンコー区のもつトンレサップ湖周辺地域という生態自然環境や民族構成などの地域的特色を中心から捉えて、カンボジア農村のある社会史をまとめることである。カンボジア研究においては、王朝史や国家規模の政治社会史は散見されるものの、実際の現地調査に基づいた社会史あるいは地域史のこころみはまだない。この取り組みには、フランス語文献をはじめとして多くの文献資料の読解と参与観察とインタビューに基づくフィールドワークの成果を融合する必要がある、正直なところ現在の私にとっては実現容易な作業ではない。しかし、10年後をみこした将来的な取り組みとしては、ぜひ考えてみたい。

近未来的な課題として、つまり具体的には今後2~3年でまとめるべき博士論文の中心テーマとしては、カンボジアにおける文化的実践の変容の問題を探求してみたい。今回の調査活動をとおして、例えば仏教寺院、村落、家庭を場として実施された多くの宗教儀礼を参与観察したが、その一つ一つの儀礼の現状分析と歴史的な変容をとおして、その変容の背景にあるカンボジア社会の側の問題とわれわれ分析者の側の理論的な問題の双方をあわせて考えたい。ポルポト時代に伝統的生活実践の断絶を一度経験したカンボジア社会において、そこでの文化的実践の過去と現在の差異を変容としてとらえ、その変容のプロセスあるいは中身を対象に考察を深めることは、簡単ではないがやりがいのあるテーマである。詳しいポイントは今後おこなうべき人類学の儀礼論を中心とした文献研究の後に明らかになると思うが、カンボジア研究という分野だけでなく、今日の人類学における文化論、儀礼論に具体的に寄与すべく、努力したい。

最後に、この文化変容の問題の探求とも関連して、カンボジアの人々がポルポト時代に過ごした社会的経験とそれに対して人々が語る現在の認識の問題も、将来はライフワークとして考えてみたい。このテーマは、今すぐに何か書き始められる問題ではないが、カンボジアの個々の人々の生活・人生と縁あって関わるようになり、また未来へ向けたカンボジア社会の行く先に関心を抱くものとして、この捉えがたい大問題を避けて通ろうとは思っていない。今後、さらにカンボジアでの滞在、カンボジアの市井の人々との交流を重ねてゆく中で、常に考えてゆくべき問題だと考えている。